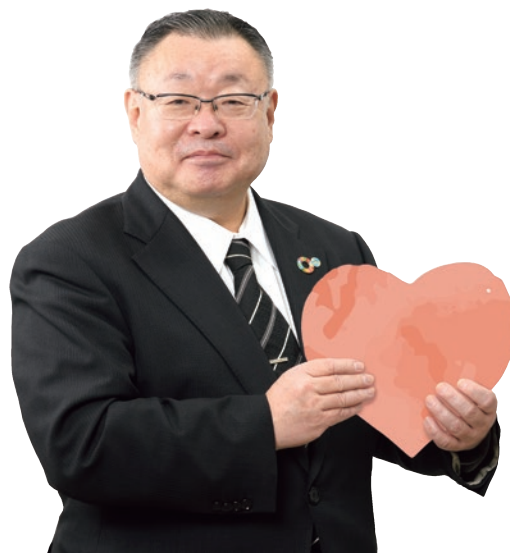


「教える＝選手がうまくなる、チームが強くなる」 というのは幻想!?

今年の夏の甲子園は、慶應義塾高校の優勝で幕を閉じました。慶應義塾を創設した福澤諭吉は、幕末に欧米諸国を見聞し、帰国後、古いしきたりや慣習にとらわれない教育を実践、その精神は「独立自尊」として現在に引き継がれています。「独立自尊」とは、自他の尊厳を守り、何事も自分の判断・責任のもとに行うことを意味しています。優勝インタビューで森林貴彦監督は、「うちがこうやって優勝することで高校野球の新たな可能性とか多様性とかそういったものを示せばいいと、日本一をめざして常識を覆すという目的に向けて頑張っ



「インストラクター」から「エデュケーター」をめざして

てきた」と答えていましたが、過去のインタビューでも「選手が考える野球」について話しています。「指導する上で一番大切にしているのは、選手が自分で考えることです」「やらされる野球では何もおもしろくない。指導者側がよかれと思っても、『教えるリスク』をもう少し考えないと、『教える＝選手がうまくなる、チームが強くなる』というのは幻想に過ぎません」「ちょっと遠回りになっても、選手に考えさせて、試行錯誤して最終的に自分で掴んだものが真の力になるという考え方です。

教育とは「可能性を外に導き出すこと」!

日本と欧米の教育には根本的な違いがあるとよく言われます。英語の「education」の語源はラテン語で「e(外へ)」「ducere(導く)」という二つを意味しています。欧米の教育は「教えること」ではなく「可能性を外に導き出すこと」が重視されます。また、日本でも個性の尊重が言われていますが、欧米では個性尊重は当たり前で、大切なのは個性を「伸ばす」こと。型にはめるのではなく、個性に合わせて個々の才能を伸ばし、自主性を重んじることです。みんな一緒ではなく、その子の能力に合わせた教育を行います。日本では「4掛ける6は何」と聞き、

答えは「24」に特定されます。英国では「掛けて24になるのは何」という聞き方。答えは唯一ではなく、異なる答えを考え出そうとする力を重んじます。日本では勉強は「覚えるもの」。欧米では記憶力を問うテストはほとんどなく、自分が得た知識を活用することや考えることが問われます。OECDの学力調査で日本の子どもが「読解力」の成績が落ち込み、表現力・記述力や「情報を評価する力」などが不十分であると指摘される所以です。

4月に公表された文科省の「教員勤務実態調査(令和4年度)」を踏まえて、中央教育審議会でも再び学校の働き方改革が議論されています。欧米では、学校は学問を、教会では道徳や倫理を学び、野外活動やボランティアは地域で行い、躰は家庭でと言われています。日本では多くのことが学校に持ち込まれ過ぎています。学校の働き方改革をすすめて、子どもや若者が自ら「学ぶ」ことと、教師や大人が「教える」ことの本質をもう一度確認しましょう。そしてこれから教員をめざす若者には、知識や技能・技術を教えるだけの「インストラクター」で終わることなく、子どもの持っているものを引き出す人、そんな「エデュケーター」としての教員をめざしてほしいと思います。